いまどきの歴史

一番新しい日本の一ページ

鶏、おまえもか?

牛に続いて鶏までも!! 食肉不安に揺れるどんぶり業界に、いつ光明は差すのか?

アメリカ産BSE騒動による輸入停止措置により、大手牛丼チェーン店から牛丼が姿を消した。そして、鶏丼などの代替メニューが次々と発表されたが、今度は鳥インフルエンザによる一部の食肉輸入停止に至った。タイや中国から鶏肉を輸入している吉野家は新メニュー「焼鶏丼」を3月中旬で販売中止にする方針を発表。さらに大分をはじめ、我らが京都は丹波町の養鶏所でも感染が発見され、大ごとになったのはご承知のとおり。今や国産の鶏にさえ不安が及んでいる。食品表示も信じられぬ今、肉喰らいたちはいったい何を食せば良いのか、途方に暮れるばかり。そこで、最近、注目を浴びているのがダチョウ肉。ダチョウ肉については数年前から業者が食肉としての認知を目指しているが、今こそがその時期ではないだろうか。ラムやカンガルー、ターキー、エミューも魅力的だぞ。これら日本であまり馴染みのない食肉は、コストなどの問題が山積みだが、人間、危機を好機ととらえられずに何の進歩がある?今こそ食卓に広がりを!

無資格ガイド

「よそさん」に頼りっぱなしではなく自ら京の魅力を語れる街を目指すべき

京都市を訪れる外国人団体ツアーに、無資格ガイドを付けているケースが多いらしい。特に中国や韓国などの旅行会社主催のツアーに無資格ガイドが目立ち、調査では3分の2の団体が無資格だったという。ひどいものには「日本にはまだ刀を持った侍が暮らしている」という紹介もあるとか。日本では外国人対象の通訳ガイドで報酬を受け取る場合、語学はもちろん、日本の地理、歴史の知識を要求される「通訳案内業」という国家資格が必要。無資格ガイドが増えた背景には、経費削減のために添乗員がガイドを兼ねているケースが多いということと、実際に報酬を受けていないと取り締まることができないということ。京都は「国際観光都市」と言いながら、観光地の人々が自ら京の魅力を外国語で説明できないという問題もある。数カ国語を使いこなすのは簡単ではないが、通訳ガイドに頼りっぱなしよりは、自らも正しく京都の魅力を外国人に伝える努力も必要だと思うのだが?

町家再生新展開

京都市が打ち出した景観保存プロジェクトは店舗ではなく、住宅としての町家再生

町家を再生した店舗が増え続けてきたが、京都市は町家を賃貸住宅として再生する際、改修費の3分の2を補助する制度を始めることになった。対象は賃貸住宅として活用する場合のみ。一軒の町家に複数世帯が入居できるように改修したり、手すりなどのバリアフリー化する工事に適用される。これは市が01年に打ち出した「京都らしさと地域の個性を活かす」というプランの一環。'04年度には一般向けと高齢者向けの住居5軒の整備に着手するそうだが、賃貸住宅としての物件活用をためらう所有者には吉報になりそう。ただし、マンションとは違い、防音などの面で劣る町家は近所との付き合いが難しい。これまで隣人の顔を知らなくてもやっていけるマンション住まいを続けてきた人が、同じ感覚で町家に住んで、ご近所と良好な関係を築くのは難しい。市が町家の活用に協力してくれるのはとても良いことだが、所有者は借り主に町家という生活空間を提供するだけでなく、ご近所付き合いを含む「昔ながら受け継がれる京都の礼儀・しきたり」も伝えることが必要だと思う。

文◎大塚　祐希

京都で活動するライター集団・大塚祐希事務所CEO。昨年のイスラエル滞在以来、異文化を紹介するTEXTREAM PROJECTを始動。20カ国に及ぶ人々とネットワークを構築し、ボーダレスな活躍を目論む。

HP●http://www1.ocn.ne.jp/~tsukapon/

イラスト◎両口　和史

1967年京都市生まれ。京都精華大学美術学部卒業。北山のオフィスにて様々なキャラクターやイラスト制作をおこなうユニット「キャトル・イラストレーション」のチーフ。猫、フランス車、家具、雑貨、レコード、本、おもちゃ、平日の公園。それらがイラストを構成するエッセンスである。HP●http://www.d1.dion.ne.jp/~ryoguchi